

〔視察報告〕

ヨーロッパ博物館視察記 VII

Survey Reports of the Museums in Europe VII

間 多 善 行

Yoshiyuki MADA

ロンドン 2

ロンドン到着2日目は前述のようにブリティッシュ・ミュージアムに半日を費いやしたが、ここで博物館学的見地から概評を加えておきたい。

そもそも、私のこの度の旅行の目的の第一はブリティッシュ・ミュージアムを見ることであった。それは例えば、この博物館『ヨーロッパ』の展示品の中の最大傑作というべきものである。それにしても僅か半日でブリティッシュ・ミュージアムを見たとは片腹痛い、せめて2、3日かけてから始めて、見て来たと言えという反論がでるかも知れないが、それについては私は「松田式観察法」という「物の見方」を会得しているから半日でも結構構るべきところは見ているのである。「松田式観察法」とは前にも、ミケランジェロの『最後の審判』のところで話した、人間国宝・松田権六氏から私が15年間付合っている間に教わった方法で、機会があったら詳しく説明するが、非常に興味深く、認識論の真髄に関する問題である。今それを説明する暇はないが、簡単にいうと「物の真相を見極めるのは時間の長短によらない」「自己の意識の建て方」によるのだ、ということである。その問題は別の機会にゆずるとして、この憧れの大博物館を見た後は、一旦は満足したものの更に次の問題が群雲の如く湧上って来た。

その第1は、この膨大なコレクションは大英帝国という、18世紀から19世紀にかけて出現した世界的な海洋国家の存在と、その時代に澎湃として盛上ったコレクション熱の双方が効果的に作用して始めて実現されたもので、奇跡に近いものであろうということである。現に今の世界状況のもとではどうであろうか。いかに軍事力が優勢な国家であろうとも、いかに経済力が抜群の国家であろうとも、他国の遺跡を勝手に発掘して、その重要なものを自国に持ち帰ったり、その持帰ろうとしたものを戦争に勝ったからといって横奪りしたりすることが許されるであろうか。決して許されないとあろう。現に日本の捕鯨のように、自然の生物を公海上で捕ろうとすることさえ、世界から袋叩きにされる時代である。それではブリティッシュ・ミュージアムはなぜそれが許されたのであ

ろうか。こういう問題は博物館学の領域外だとお考えであろうか。私はそうは思わない、現在とはかく、将来はこういう問題にアプローチする「博物館社会学」という分野が開拓されることは必至であると私は考えている。そういう意味で、ここではほんの少量のスペースを割いてこの問題を考えることをお許し頂きたい。

すなわち、大英博物館の殆んど大部分のコレクションはどのようにしてできたかという、英国では18世紀から19世紀にかけて産業が急速に発展し、他国にさきかけて産業革命を達成したから富の集積が莫大な量になったこと。その当時は中東、エジプト、インド等古代に高い文化水準に達して、多量の文化遺産を残した国々が古代が終って中世の眠りに入っていたから、それらの国々へ探検隊・発掘隊を派遣する経済力と暇とが英国にはふんだんにあったことが最大の理由である。第2には、当時の英国はスペインの無敵艦隊を破って世界一の海軍と商船隊を擁していたから膨大な発掘品を運ぶのも易々たることであった。つまり大英博物館は、19世紀における大英帝国の国力伸長の一大モニュメントであると思う。現在であれば地上の最強国の米・ソ超2大国でもそのような行為は許されはしない、その意味でブリティッシュ・ミュージアムには時も味方していたといわねばならない。

このようにして、一つの建物の中に人類文化の曙の遺品が集約されていることは、その方面の専門家にとっては、これほど有難いことはない。しかし、よく考えて見るとこれは中央集権的な啓蒙期の方法論をそのまま現在に持越しているのだ、とも考えられる。あらゆる面で文化が中央に集中しているときは、そうしなければ研究ができない時代があったことは確かだ。けれども現在のよう通信と情報網が発達した時代になるとその懸念はなくなっている。その上、日本のように狭い土地に大規模土木工事が次々に施工されると、遺跡・遺物の発掘は引きもきらず、とても中央集中方式では捌き切れるものではない。いやでも現地保存、現地展示、現地研究主義がとられざるを得ない。これは考古学の例だけを挙げたのであるが、あらゆる部門でそういう傾向が出て来ることは間違いないと思われる。その意味で100年前の博物館

社会学的思想がそのまま化石のように残っているサンプルの一つがこのブリティッシュ・ミュージアムであると私は考える。現在、収蔵品点数400万点を誇っているが、これは軍備における大艦巨砲主義、産業経済における重厚長大主義と同じで、やがては見直される時季が来ると私は確信している。こういうと「お前は、前にフィレンツェのウフィツィ美術館のところで、欧米の大博物館を見ていたら日本の博物館は貧弱で見すばらしいといったではないか、それなのに今度は大きすぎるの、大艦巨砲主義だなどとけなすのは矛盾しているではないか」といわれるかもしれない。もっともである。けれどもそれは程度の問題で、ある程度までは多くなければいけないが、限度を超えて大きくなることはマイナスであるという意味にとって頂きたい。私も今度ブリティッシュ・ミュージアムを見るまでは、そういうことは考えたこともなかった。ただ「博物館社会学」が将来必要になるであろうことは先年書いた私の小著『新説博物館学』の序言に予想して置いたとおりである。そして、この大きき問題は「博物館適正規模論」という分科を作って将来研究すべきであると私は考えている。話がとんだ方向へそれてしまった。しかし、そういうことも考えたくないような圧迫的物量である。評点は星5つの頂点とお考え頂きたい。とにかく、今日はここまでにして、ホテルへ引上げ、地図を見ながら明日の計画を建てることにしよう。

### 13. テート美術館（テート・ギャラリー）

8月15日、ロンドン第3日目である。昨夜作ったスケジュールにもとづいて、タクシーでテート・ギャラリーへ行く。このテムズ河畔の小じんまりした美術館は、大英博物館を見た後だからこそ小じんまりしたなどといっているが、どうして、日本にはこれだけの美術館はない。サー・ヘンリー・テートのコレクションを中心に、英国の絵画を主として、ヨーロッパの名画を集めてある。一体、英国というところは不思議に芸術家の少ない国で、西洋美術史をひもといて英人の名が出て来るのは印象派以前でコンスタブル、印象派初期でターナー位のものである。しかし、ここへ来て見ると英国にも画家がいなかったわけではないことがわかる。しかし、個性のある画家がいなかったことも確かである。ここで見渡して見て個性が目立っている画家は英国人ではターナー一人である。英国の社会自体が芸術を求める雰囲気にならなかったのであろう。それは、あのパリで印象派運動の盛んであった19世紀後半を見ればわかる。英国はナポレオン戦争後の産業革命の大成と海外領土の拡張に夢中になっていて、芸

術どころではなかったのであろう。しかし、英国人が芸術にもっと敏感な国民であったならば、あのヴィクトリア女王の興隆期に偉大な芸術家が少くとも数人は出ていていいはずである。それが、後にも先にもヨーロッパ美術史に影響を及ぼしたと思われる芸術家がターナー一人であったということは、やはり英国人が芸術に関心の薄い国民であったことは間違いないと思う。ただし、これは、そのことが善いとか悪いとかの価値評価をしているのではなく、事実を分析しているだけであるからその点誤解のないようお願いしたい。同じ時期、フランスでは印象派運動が盛んであったし、その少し前はロマン派が活躍していた。ドイツでは音楽界でバロックのバッハ以来作曲家が輩出してロマン派のベートーヴェン、シューベルトその他世界的作曲家が綺羅星のように並んでいる。もう少し時期を逆のぼるとフィレンツェで紹介したようにイタリアのルネサンス芸術家群がある。英国はその時期、ニュートン以来の伝統を継いで自然科学、アダム・スミスの伝統を継いで経済学等プラクティカルな面で目醒ましい活躍をしているが、芸術・文芸ではシェークスピア一人という状態である。さて、ここの評点は星三つの上というところか。

このようなことを考えながらテート・ギャラリーを出て、テムズ河畔をぶらぶら歩く。絵や写真でなじみの深い国会議事堂、ビッグベンなどを見ながら歩いていると、もう何度も来ている土地のような気がする。考えて見ると中学時代から漱石の『倫敦塔』などで旧知の間柄である。それから少し西の方へ入ってウェストミンスター寺院へ行く。ここも女王の戴冠式などでおなじみだけれども、ローマのサン・ピエトロ寺院やフィレンツェの花のサンタ・マリア大聖堂などを見て来た眼には小じんまりとした中級寺院に見えた。

さて、この付近も大体見終ったのでスケジュールに従って、タクシーで次の目的地ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムに行く。この付近は東京の上野に似て、ロイヤル・アルバート・ホールを始めとして、Royal Geographical Society, Royal College of Art, Royal College of Music, Imperial College, Royal College of Science, Science Museum, Geological Museum, Natural History Museum 等文化施設が林立している。そうして、その傍にはハイドパークから続いたケンジントン・ガーデンが接しているのでちょうど上野を数倍に拡張したような調子である。ここだけで一通り廻ると4、5日はかかると思われるが、私の場合はこ

の一廓を半日で廻ろうというのであるから、素通りしても全部は歩けない。結局、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムとサイエンス・ミュージアム、ジェオロジカル・ミュージアムの3館を駆足で廻ることで終わってしまった。仕方がないので、その3館を「松田式観察法」で観たところを述べることにする。

#### 14. ヴィクトリア・アンド・アルバート・博物館

地図で見るとこの界隅では一番広大な建物で、さすが英王室のコレクションを貸出されたものだけあって、その豊富さはブリティッシュ・ミュージアムに劣らない。世界各国の武器、ブロンズ、絨氈、時計、コスチューム、刃物類、刺繍、家具、ガラス製品、金、銀細工、錫器、宝石類、レース、漆器、楽器、油絵、水彩画、木彫に分類して展示されているそうであるが、とても逐一見られる量ではない。今印象に残っているのはラファエロの大作が八点、一室を占領していたことだけである。評点は星四つである。

#### 15. 科学博物館 (Science Museum)

日本の国立科学博物館は自然史から始まって、科学史、産業工学、工芸科学までを含めて、一館で科学全域を網羅している。英国では、この一廓に日本の科学博物館の展示範囲にあるものを三つに分けて Science Museum (科学博物館)、Geological Museum (地質学博物館)、Natural History Museum (自然史博物館)の三館を配置している。

そのうち、この科学博物館は産業工学を主として展示されている。何しろ世界にさきがけて産業革命を完成した国だから、産業機械に関しては何処にも負けないぞという自負が感じられる。入ったすぐの吹き抜きのホールには、ワットが発明した当時の蒸気機関の一つが、その当時のままの巨大な姿を現わしており、今にも動き出しそうに磨き上げられ、油を指してあるから、自然史博物館の恐竜の骨格よりもダイナミックな生息きを感じられるような気がする。また、蒸気機関とともに産業革命の先兵の役を果たした紡績機械も、アークライトの発明当初のものから、精巧なミュール精紡機に至るまで各段階のものが揃えられており、さすが近代資本主義を育てた国だけあると感動を覚えた。この科学博物館だけで上野の国立科学博物館より大きいから、三つ合わせると、国立科学博の三倍以上の規模になることは確実である。どうも、こうして比較して行くと日本の博物館後進性は歴然たるものがある。実は私は北の丸にある科学技術館がこれに相当するのかも知れないと思って、あれを未だ観てなかったの

今回本稿を草するに当って一日を割いて、視察して来た。そして、北の丸の科学技術館は、このロンドンの科学博物館とは全然性格を異にするものであることがわかった。どう違うかを大雑把にいうと、ロンドンの科学博物館は産業革命を科学的進歩によって歴史的に跡付けようとしているのに対し、北の丸の科学技術館は現在の技術から将来のパフォーマンス性を夢見ているような違いがあると思う。これはどちらが善い悪いの価値評価の問題ではないことをお間違いないようお願いしたい。さて、ロンドンの科学博物館の評点であるが星四つの上に位すると思われる。

#### 16. 地質学博物館 (Geological Museum)

地質学専門の博物館で、他では余り聞かないような気がする。地質調査所の附属機関として設けられたもので、地質調査所のコレクション、岩石、化石等の1835年創設以来の数百万点に上る集積を継承しており、また英国内の5万分の1の地図の発行も担当して、日本の国土地理院のような役目も果している。しかし、展示は停滞的でなく、各室とも生々とした新鮮な感じがした。それもそのはず、実は今年(1988年)の6月1日、学会の例会にここのキュレーターをしておられるフレデリック・W・ダニング博士が講演されて、感銘を受けたが、そのダニング博士が1970年以来専任のキュレーターとして、展示の全責任を持っておられるのだそうである。ああいう意欲的なキュレーターがいれば展示が生き生きして来るのは当然であると、この稿を書きながら感銘を新たにした。博士は中国政府の招きで北京で講演された帰途、来日されたのを丹青社の好意で、学会の例会にお招きすることができたらしいが、こういう催うしは、9月のフランスのラーニュ博士の講演といい、大変な難いことなので今後も機会あるごとに催うして頂きたい。ラーニュ博士の講演についてはパリのところで述べることにする。さて、ダニング博士の話に戻るが、博士が講演した中で一番印象に残っているのは、地球の地殻の厚さをどういふふうに表示したらいいかを館長と話していたとき、博士がちょうどそこにあったフット・ボールをとって、その辺を見廻すと切手があったので、それをフット・ボールに貼りながら「こんなものでしょう」といったところ、館長が「あ、それでいこう」といって、そのままそれを展示して説明を付け、現在もずっと展示してあるという<sup>くら</sup>栄りである。その当意即妙の比喩的着想もさることながら、そういう手近のものを展示に使うという大胆さは日本人には欠けている英国人のプラク

ティカルな面であると思う。ただ、英国でフット・ボールといえばラグビーであろうが、もしそうであればあの細長いラグビー・ボールが地球の表現に使われているのであろうか、それを聞き洩らしたのがちょっと気にかかるが。ここは規模が少し小さいので評点は星三つの上として置く。

さて、地質学博物館を出たところで夕景になったので、自然史博物館に入ることは諦めて、外観だけを見て帰ることにする。地質学博物館はケンジントン・ガーデンから来たエキジビション・ロードがクロムウェル・ロードにT字形に突当たった右角にあり、向いが最初に入ったヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムであり、左隣りがさっき観たサイエンス・ミュージアムである。自然史博物館はT字に突き当たった右角の次に並んでクロムウェル・ロードに面している。ここも正面はアルバート・ミュージアムに劣らず大きい、地図で見ると奥行きがアルバートの半分位である。それでも星四つの値打ちはありそうである。ちょっとでも覗いて見たかったが、入口へ行くと出て来る人ばかりで、気押されて引返してしまった。かくしてロンドン第3日目は終り、明日第4日目はロンドン塔を見学する予定である。

明くれば8月16日、一人歩きも大分馴れて来たので、今日はタクシーを使わず地下鉄で廻って見ようと思う。ホテルから最寄りのベーカー・ストリート駅までは1キロ近くあるが、片側はケンジントン・ガーデンで、反対側は静かな住宅街なので散歩を兼ねて、歩いて行く。夏目漱石などもこんな住宅に下宿してたのではないかと思われる小じんまりとした集合住宅が続いている。しかし、戦後開けたところらしく、古い家はない。地図で見ると、ベーカー・ストリート駅の隣りがあの有名なマダム・タッソーの蝸人形館なので、話の種に見て置くことにした。行って見ると何と入口まで相当長い行列が続いている。4列で5、60メートルはある。しかし、折角スケジュールに組み込んだのだからと行列に加わることになった。どうなのか、今度の旅行中行列して入ったのは後にも先にもこのタッソーとこの日の午後行ったロンドン塔との二ヶ所だけであった。

さて、タッソーはこの人気にも拘わらず、私は左程感心しなかった。成る程、蝸人形は半透明で白人の皮膚の色を生きているように見せるのであるが、それは局部的なこと、全体に立っている姿は一目見て人形と解る生硬さが抜けていないことに物足りなさを感じる。それでもこれだけ人気があるのは、英王室の家族群とそのコスチュームが見られるからだろうと思う。タッソーを見終ってからヨーロッパへ来て始めての地下鉄に乗るわけで

ある。フランクフルト、ジュネーブ、ウィーン、リスボンには地下鉄を必要とする程の大都会ではないし、ローマは全市域の地下が遺跡で充満していて、工事のために地下を掘るなんてとんでもないことである。マドリードはどういうものか200万都市であるが地下鉄がないようである。さて、ロンドンの地下鉄は歴史が一番古く、しかも、深いところを通っているので、第二次大戦中は空襲の際防空壕の代りに使われた位であるから、どこか違うかと思ったが、乗って見て日本の地下鉄と違うところはどこもなかった。

#### 17. ロンドン塔博物館

私は中学時代に漱石の「倫敦塔」を読んで、ロンドン塔といえば陰惨な、映画で見る中世の牢獄のようなところであろうと想像していたが、入口から既に暗いイメージが吹き飛んでしまった。漱石の文章による連想では、昼なお暗い森閑とした大きな室の奥から甲冑を着けた騎士が槍を突き立てながら足音高く歩み出して来るような光景を描いていたが、どうしてどうして森閑とした雰囲気どころか入口で既に千人以上の観光客が百メートル以上に亘って行列を造っている有様で、さ程広くない構内は何処へ行っても人々々々で、幻想など描く場所はどこにもなかった。塔といっても実は平城で、その廓内に見張塔や城廓、武器庫などがあるに過ぎない。ただ、政治の中心にあった関係で、王室の興亡にまつわる政治犯、王子、貴族達の幽閉、処刑の場に使われたわけで、その葛藤史を漱石がよく読んでいて「倫敦塔」の一文となったのであろう。

さて、構内には展示室があって、武器・武具・服飾品等を展示してある。最初、入口で行列していたのは入場券を買うため、幾ら払ったか忘れてしまったが、この展示室を見るための閲覧料はその中に含まれているらしい。その外に館内に特別展示室があって、そこへ入るためには更に幾らかの入場料を払うことになっている。中には王家の宝物が展示してあるらしい。ここで私の癖の妙な反骨精神が働いて「エジプト・ギリシャ・ローマの素晴らしい美術品はブリティッシュ・ミュージアムで只で観せておきながら、ここへ来て王家の物だからと金をとるとはけしからん」と妙なことにこだわって入らなかったのは、今から考えるとつまらないことをしたものである。もっとも後で聞いたところによると、見なくて「しまった」と思うようなものはなかったようである。評点は城廓全部も引くくめて星三つというところか。

これでロンドンの日程は終った。明日はドーバー海峡を渡ってパリに行く予定である。